

# 千葉市向城跡

2010

2010

株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ  
財團法人 千葉市教育振興財團

# 千葉市向城跡

2 0 1 0



## 例言

1. 本書は、千葉市緑区に所在する向城跡の発掘調査報告書である。
2. 向城跡の発掘調査は携帯電話基地局建設に伴うもので、財団法人千葉市教育振興財団が株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモより委託を受けて実施した。
3. 本書に所収した遺跡の所在地・調査期間・面積・担当者は次の通りである。
  - ① 所在地 緑区板倉町33番1、34番1の各一部
  - ② 調査期間 平成21年6月25日～平成21年8月4日
  - ③ 調査面積 上層 875m<sup>2</sup>（確認・本調査）
  - ④ 担当者 古谷 渉
4. 整理作業及び本書の作成は、平成21年8月5日～9月18日に行い、古谷渉が担当した。
5. 遺構・遺物の写真は古谷が撮影した。
6. 遺物の記載は篠瀬裕一氏（千葉市立郷土博物館）の協力と助言を得た。
7. 出土遺物及び調査記録は、すべて千葉市埋蔵文化財調査センターに収蔵保管している。
8. 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）  
千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、千葉市立郷土博物館

## 凡例

1. 本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。
2. 土層及び遺物の色を記号で示してある場合は、農林水産省監修「新版 標準土色帖」による。
3. 本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりであるが、各図中に縮尺を示してある。  
遺構実測図の縮尺は、土坑：1/40である。  
遺物実測図の縮尺は、土器復元：1/4 土器破片・砥石：1/3 銭貨：1/1である。
4. 第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「東金」「茂原」より作成したものである。

# 目次

例言・凡例

目次

第1章 はじめに .....	1
1 調査に至る経緯	
2 遺跡の位置及び周辺遺跡	
3 調査の概要	
4 向城跡と板倉城跡	
第2章 検出された遺構と遺物 .....	6
1 郭	
2 土坑	
3 出土遺物	
第3章 まとめ .....	10
写真図版	
抄録	

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡 .....	2
第2図 周辺地形図 .....	3
第3図 遺構配置図 .....	4
第4図 向城跡と板倉城跡 .....	5
第5図 レンチ配置図1 .....	7
第6図 レンチ配置図2 .....	8
第7図 レンチセクション図 .....	9
第8図 土坑全体図 .....	10
第9図 土坑実測図 .....	11
第10図 出土遺物実測図 .....	12
附 図 千葉市向城跡全体図	

## 写真図版目次

写真図版 1	写真図版 3
遺跡遠景（南西より）	2号土坑セクション
遺跡対岸遠景（北東より）	2号土坑完掘状況
調査前状況1	3号土坑セクション
調査前状況2	3号土坑完掘状況
調査前状況3	4号土坑及び9号土坑完掘状況
調査前状況4	5号土坑完掘状況
腰郭1	6号土坑完掘状況
腰郭2	6号土坑セクション
写真図版 2	写真図版 4
遺構状の落ち込み	6号土坑完掘状況
作業風景（郭）	7号土坑セクション
完掘状況（郭）1	7号土坑完掘状況1
完掘状況（郭）2	7号土坑完掘状況2
完掘状況（郭）3	8号土坑セクション
基本層序セクション（郭）	8号土坑完掘状況
1号土坑セクション	トレンチ5
1号土坑完掘状況	作業風景（下段）
	写真図版 5
	遺物写真

## 第1章 はじめに

### 1 調査に至る経緯

平成20年10月14日、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモより、千葉市緑区板倉町33番1、34番1の各一部（面積875m<sup>2</sup>）の携帯電話基地局建設設計画地について、文化財保護法第93条に基づき「埋蔵文化財発掘の届出について」の文書が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。

届出地を含む一帯は、中世の城館跡である向城跡（緑-No386）に該当しており、現地踏査の結果、届出地内に郭と考えられる平場が確認されたため、平成20年12月5日付けで、875m<sup>2</sup>全域について発掘調査が必要な旨を事業者に通知した。

この結果に基づき、市生涯学習振興課と事業者が協議し、確認・本調査を実施することで合意し、事業者から委託を受けた財団法人千葉市教育振興財团埋蔵文化財調査センターが平成21年6月25日から同年8月4日までの期間で発掘調査を実施した。

(千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課)

### 2 遺跡の位置及び周辺遺跡（第1図）

向城跡（1）は、東京湾水系の村田川に注ぐ支谷に面した、標高約45~80mを測る丘陵上から斜面部に位置している。中世城館跡として周知されており、向砦跡とも呼ばれている。過去に発掘調査されたことはないが、郭・腰郭・土塁・空堀などが確認されている。

周辺には同時代の城館跡が多数存在しており、向城跡はその遺跡群の一角に位置している。北東へ約3.7kmの台地上には、中世戦国時代の城館跡である土気城跡（2）が所在する。千葉市と大網白里町にまたがっており、南白亜川と鹿島川の分水嶺に位置している。過去に4回の発掘調査が行われており、建物跡、地下式坑、堀などが検出されている。出土遺物は中世前半期から15世紀前半までのものが少量みられるが、16世紀代のものが主となる。戦国時代酒井氏が本城（根拠地）として、周辺に出城や砦を配置していたと推測され、向城跡もその出城の一つであったと考えられている。

北東へ約3.2kmの台地上、土気城跡の南隣には、中世の城館跡である土気中台跡（善勝寺城跡・善勝寺砦跡）（3）が所在する。善勝寺城跡とも呼ばれており、土気城跡の南側に隣接する出城と考えられている。

東北東へ約2.7kmの台地上には、中世戦国時代の城館跡である辰ヶ台城跡（辰ヶ台砦跡・小中城跡・金堀砦跡）（4）が所在する。

北東へ約2.7kmの台地上には、中世の居館跡または屋敷跡である黒ハギ遺跡（5）が所在する。居館跡もしくは屋敷跡と考えられる区画跡が検出されており、時期は13~15世紀代を中心である。

北へ約1.8kmの台地上には、中世の城館跡である大谷城跡（6）が所在する。主郭周辺が郭や堀としての体裁を整えておらず、普請途上の城と推測されている。遺構の状況から16世紀戦国時代の城と考えられている。

北へ約1.5kmの台地上には、中世の集落跡である鐘つき堂遺跡（7）が所在する。中世の墓壙と掘立柱建物跡が検出されており、15~16世紀代の集落遺跡であると考えられている。



第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/25,000)

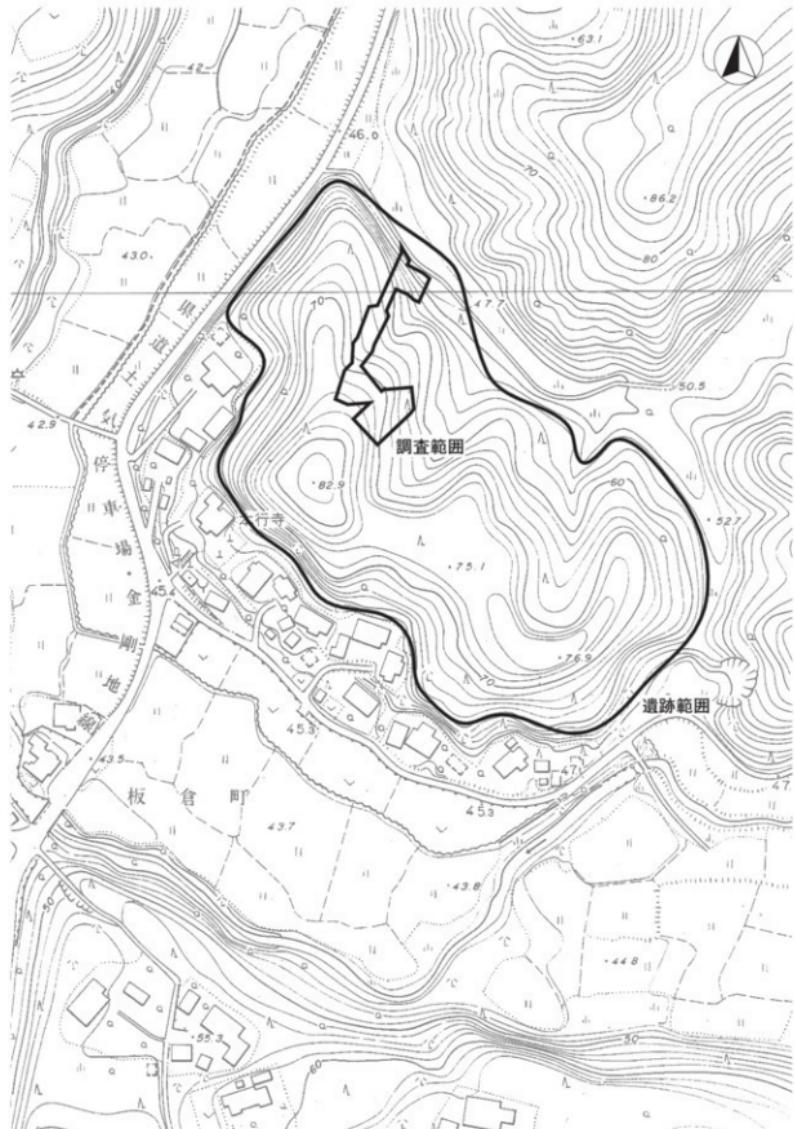
- 1：向城跡 2：土氣城跡 3：土氣中台遺跡 4：辰ヶ台城跡 5：黒ハギ遺跡 6：大谷城跡  
 7：鐘つき堂遺跡 8：後台城跡 9：御堂崎城跡 10：立山城跡 11：大椎城跡 12：小山遺跡  
 13：板倉城跡 14：板倉町遺跡

北へ約1.3kmの台地上には、中世戦国時代前期の城館跡である後台城跡（後台遺跡）（8）が所在する。中世の郭と掘立柱建物跡が検出されており、出土遺物から15世紀中頃から後半の比較的短い期間に築城し、廃絶されたものと考えられている。

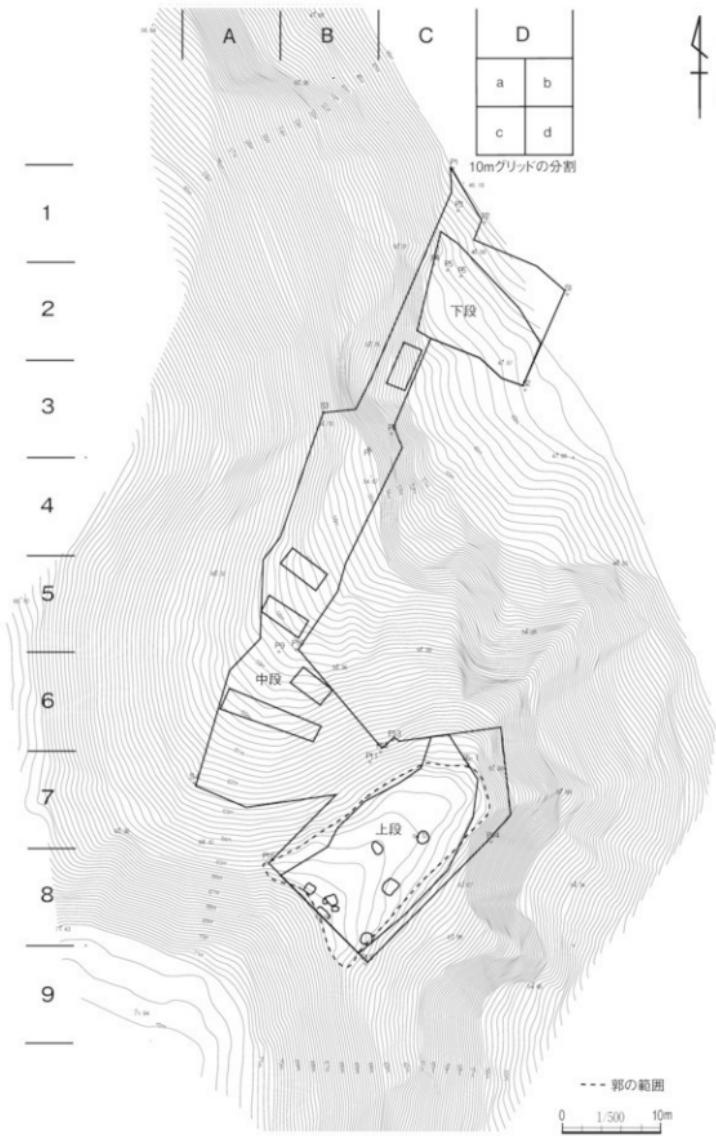
北へ約1.4kmの台地上には、中世戦国時代後期の城館跡である御堂崎城跡（9）が所在する。台地上では遺構が全く検出されなかつたが、斜面部から堀切や「犬ばしり」の溝が検出された。16世紀代の一郭構造を有する城跡と考えられている。

北へ約1.3kmの台地上には、中世の城館跡である立山城跡（10）が所在する。中世の土壘と堀が検出されている。

北へ約900mの台地上には、中世戦国時代後期の城館跡である大椎城跡（11）が所在する。発掘調査されていないが、遺存状況が良好な城郭である。典型的な直線連格式をとり、戦国時代のものと考えられる。



第2図 周辺地形図(1/2,500)





第4図 向城跡と板倉城跡(1/5,000)

#### 4 向城跡と板倉城跡（第4図）

向城跡は『日本城郭大系』によると「台地先端の眺望のより高所に、台状の遺構が存在する。また、その北側に自然の地形を利用して二段の腰郭が設けられていて、構造的には簡単であるが、周囲が険崖な要害である」と記載されており、台状の遺構と2段の腰郭がある。現状では郭、腰郭、土塁、空堀などが認められ、急峻な地形を利用した連郭式の城郭であることがわかる。

南側の谷津の対岸には板倉城跡が所在し、酒井氏が共同板倉（備荒倉庫）を建てたと伝えられている。『日本城郭大系』によると「村田川に面する台地の西側および南側に腰郭があつて、台地を整形した痕跡が認められる」と記載されており、字名「宮ノ根」と「堀ノ内」にかけて腰郭と台地整形が認められる。

えられている。

東へ約700mの台地上には、中世の城館跡である小山遺跡（12）が所在する。平場遺構と溝状遺構が検出されている。

南へ約200mの台地上には、中世の城館跡である板倉城跡（板倉砦跡）（13）が所在する。

南へ約700mの台地上には、中世の城館跡である板倉町遺跡（14）が所在する。土塁・溝・テラスが確認されている。

#### 3 調査の概要（第2・3図）

向城跡の発掘調査は今回が初めてである。今回の調査区は遺跡の北側部分の丘陵上から斜面部にかかる範囲であり、大きくみて丘陵上の上段と、斜面部の中段、下段に分けられる。上段から中世城郭に伴う郭が1か所、同じく上段から中・近世の土坑6基（うち炭窯3基）が検出された。中段、下段からは遺構は検出されなかつたが、縄文土器、土師器、砥石、錢貨（聖宋元寶）などの遺物が出土した。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 1 郭（第5・7図）

表土より20cm下で基盤層である砂層が検出され、中段で検出された暗褐色土層などがみられない点と、平坦な地形が形成されている点から、人為的な削平を受けていると考えられる。以上の点から、中世城郭に伴う郭であると推定される。遺物は全く出土しなかった。

### 2 土坑（第8・9図）

上段より9基検出され、うち3基が炭窯である。遺物は全く出土しなかった。

1号土坑は長軸125cm、短軸120cm、確認面から床面までの深度20cmで、形状は円形である。

2号土坑は長軸130cm、短軸95cm、確認面から床面までの深度45cmで、形状は楕円形である。覆土に炭化物を含み、焼土層が形成されていることから炭窯であると考えられる。

3号土坑は長軸100cm、短軸95cm、確認面から床面までの深度40cmで、形状は正方形である。

4号土坑は長軸110cm、短軸95cm、確認面から床面までの深度25cmで、形状は隅丸方形である。

5号土坑は長軸155cm、短軸不明、確認面から床面までの深度50cmで、形状は不明である。

6号土坑は長軸120cm、短軸115cm、確認面から床面までの深度30cmで、形状は隅丸方形である。中央に細長い窪みがあり、長軸30cm、短軸15cm、深度は5cmである。覆土に炭化物を含み、炭化物層と焼土層が形成されていることから炭窯であると考えられる。

7号土坑は長軸160cm、短軸135cm、確認面から床面までの深度60cmで、形状は隅丸方形である。中央に細長い窪みがあり、長軸50cm、短軸20cm、深度は5cmである。覆土に焼土粒・焼土ブロック・炭化物を含み、焼土層が形成されていることから炭窯であると考えられる。

8号土坑は長軸75cm、短軸55cm、確認面から床面までの深度50cmで、形状は楕円形である。

9号土坑は長軸55cm、短軸40cm、確認面から床面までの深度25cmで、形状は円形である。径20cm程の円形の落ち込みがあり、深度は80cmである。

### 3 出土遺物（第10図）

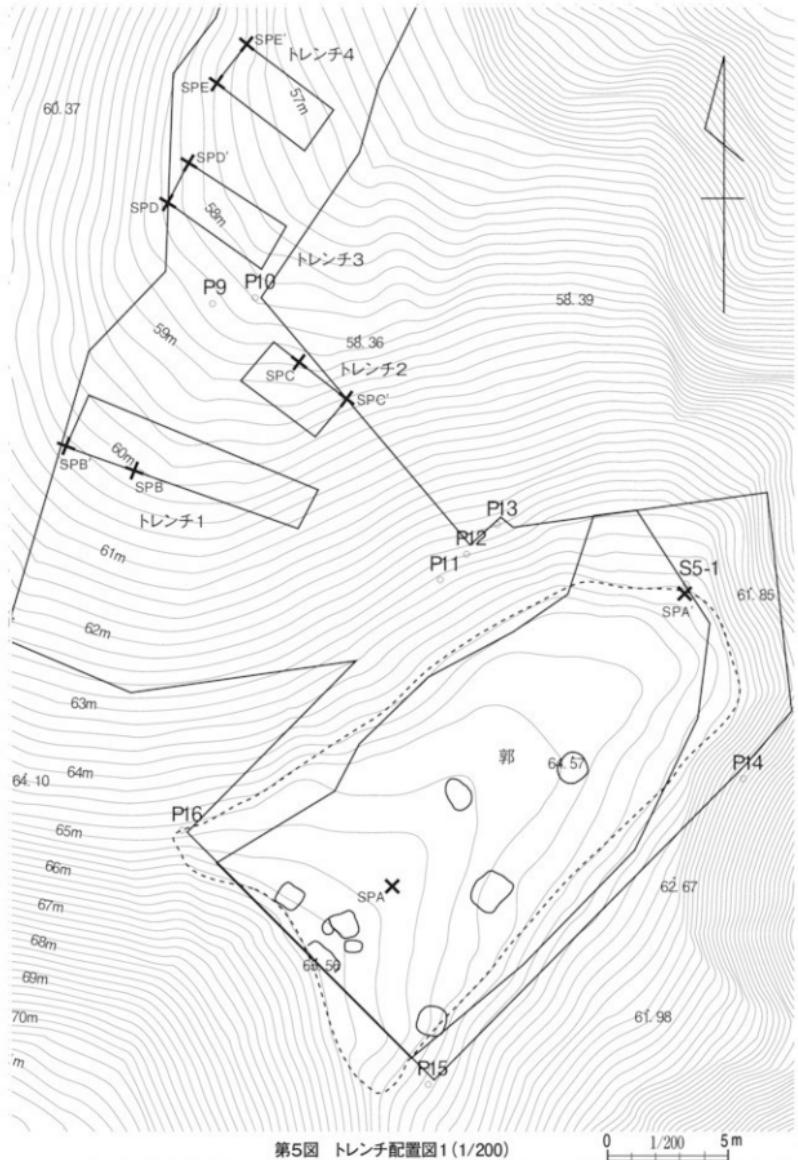
1は縄文土器でトレンチ1より出土した。縄文時代前期後半諸礎式の深鉢の胴部破片である。隆筋を貼り付けた後に、RL縄文が施されている。

2は土師器で2C-cグリッドより出土した。古墳～奈良・平安時代の甕または壺の底部破片である。底径推定値8.0cm、残存器高4.5cmである。

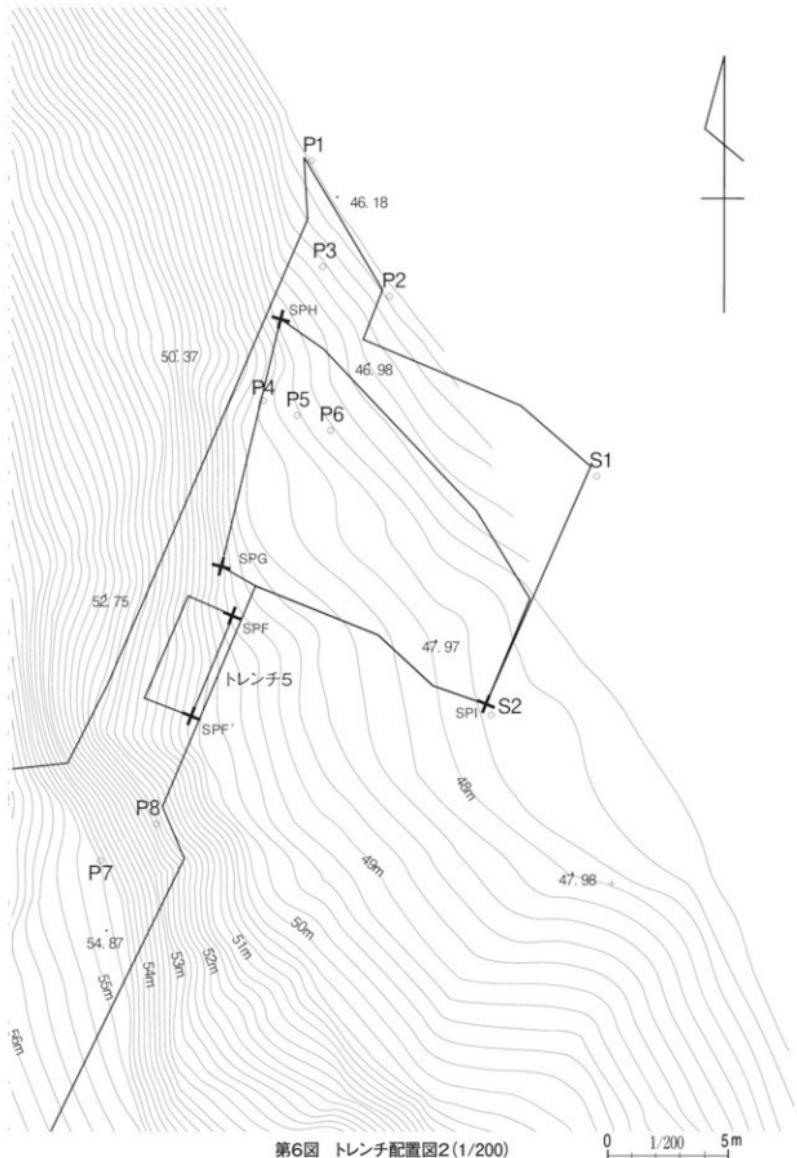
3は凝灰岩製の砥石でトレンチ1より出土した。研磨面が1面形成され、中・近世の所産と考えられる。長さ6.2cm、幅3.4cm、厚さ3.1cm、重量88.9gである。

4は凝灰岩製の砥石で2C-cグリッドより出土した。研磨面が2面形成され、側面には切断痕が残されている。中・近世の所産と考えられる。長さ11.2cm、幅4cm、厚さ3cm、重量137.5gである。

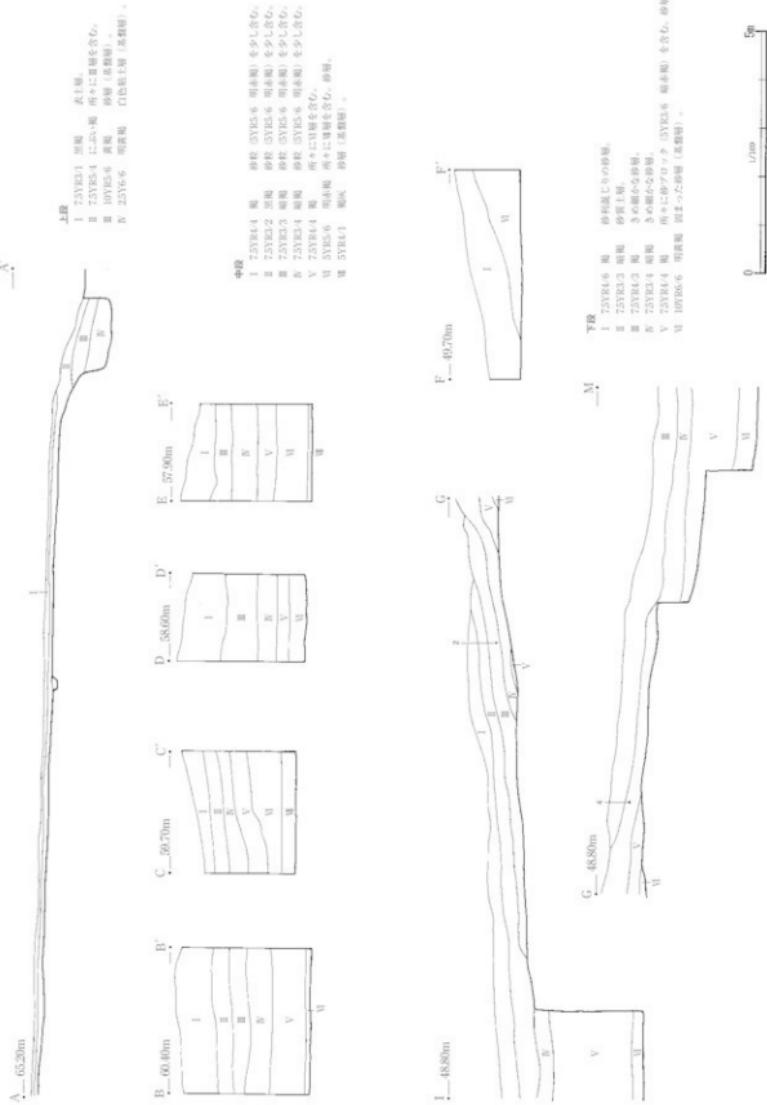
5は青銅製の錢貨で、表面採集品である。錢貨名は「聖宋元寶」で、初鑄年は北宋1101年である。作りが粗雑なことから模倣品であると考えられる。直径24mm、重量1.6gである。



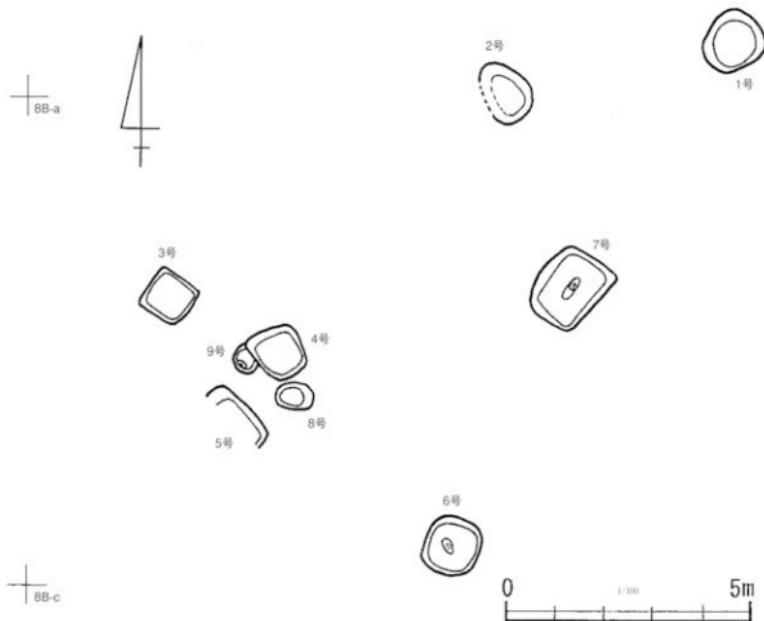
第5図 トレンチ配置図1(1/200)



第6図 トレンチ配置図2(1/200)



第7図 トレンチセクション図



第8図 土坑全体図 (1/100)

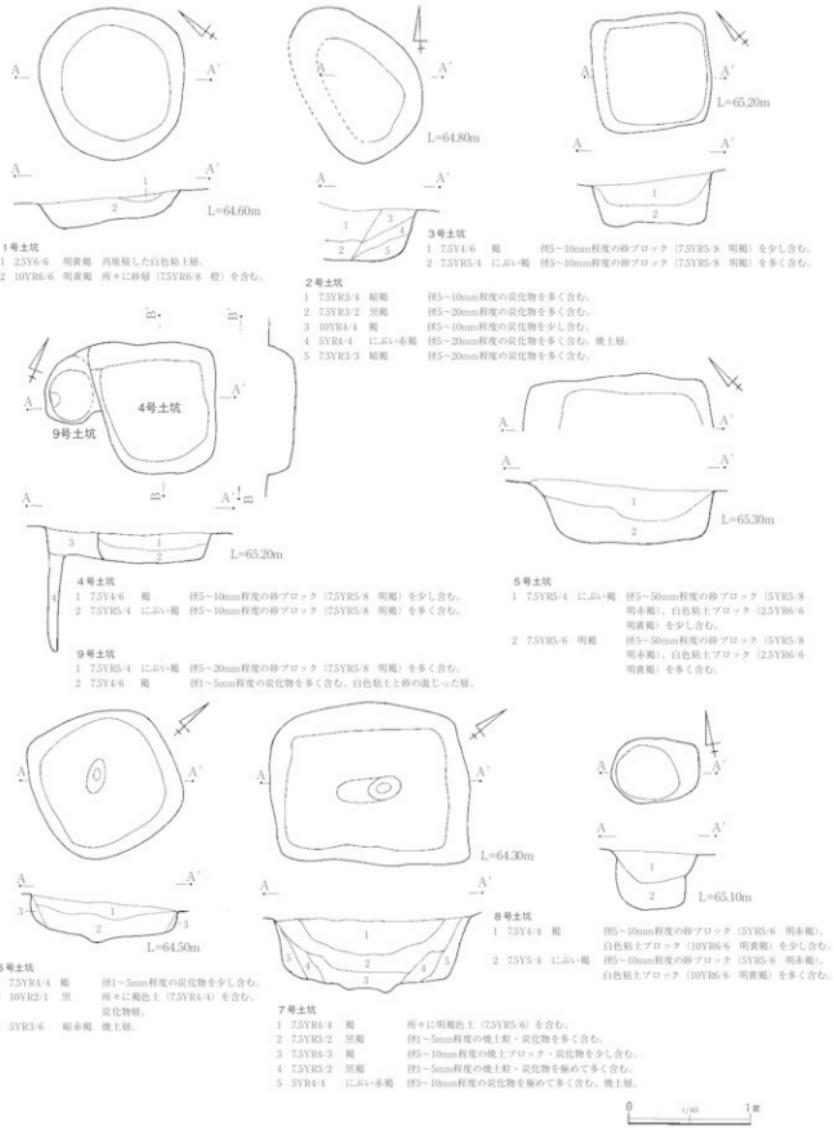
### 第3章まとめ

向城跡は中世城館跡として周知されており、周辺には同時代の城館跡が多数存在している。戦国時代酒井氏が土氣城跡を本城（根拠地）として、周辺に出城や砦を配置していたと推測され、向城跡もその出城の一つであったと考えられている。

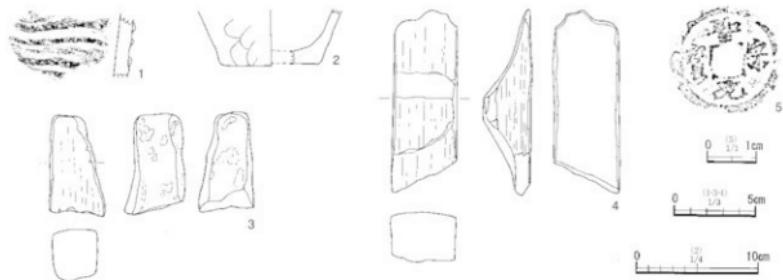
発掘調査は今回が初めてである。丘陵上の上段から中世城郭に伴う郭が1か所、中・近世の土坑9基（うち炭窯3基）が検出された。斜面部の中段、下段からは遺構は検出されなかったが、縄文土器、土師器、砥石、銭貨（聖宋元寶）などの遺物が出土した。

現状では郭、腰郭、土塁、空堀などが認められ、急峻な地形を利用した連郭式の城郭であることがわかる。隣接する板倉城跡とともに南の本納方面からの攻撃に備える作りとなっている。

今回の調査では中世城郭に伴う遺構は検出されなかつたが、郭と考えられる削平部分が確認され、中世戦国時代の城館跡としての位置づけを追認する結果となった。今後は周辺遺跡群との関係を踏まえて、土氣遺跡群内での位置づけを行っていくことを課題としたい。



第9図 土坑実測図

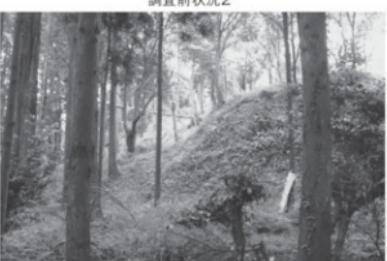
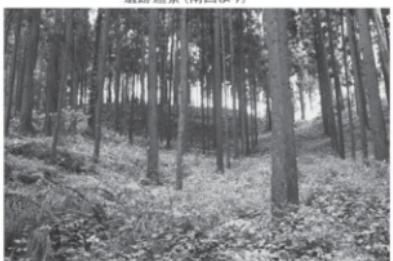


第10図 土坑実測図

<引用・参考文献>

- 千葉県教育委員会 1999 「千葉県埋蔵文化財分布地図(3) -千葉市・市原市・長生地区(改訂版)-」
- 千葉城郭研究会編 2002 「図説房縁の城郭」
- 創史社編 1980 「日本城郭大系第6巻 千葉・神奈川」 新人物往来社
- 村田修三編 1987 「図説中世城郭事典第1巻」 新人物往来社
- (財)千葉県史料研究財団 1998 「千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料」
- 山口慶一 1983 「多摩ニュータウン地域の炭焼窯について」「多摩ニュータウン遺跡-昭和57年度-第3分冊」
- 山口慶一 1983 「付編 土窯による黒炭の生産工程-八王子市南大沢在住 田倉恒一氏製炭作業見学記-」「多摩ニュータウン遺跡-昭和57年度-第3分冊」
- 岸 清俊 1988 「埼玉における木炭生産と炭窯の変遷」「埼玉県立歴史資料館研究紀要」第10号
- 朱通祥男 1988 「比企地方の炭焼き-嵐山町遠山の白炭窯の製作工程について-」「埼玉県立歴史資料館研究紀要」第10号
- 朱通祥男 1989 「寄居町三品の白炭技術-古老が語る昭和初期の炭焼きの一日-」「埼玉県立歴史資料館研究紀要」第11号
- (財)千葉県文化財センター 1984 「市原市瀬又北・瀬又南、千葉市大木戸・板倉町遺跡」
- (財)千葉市文化財調査協会 1992 「御堂崎城跡」「土気南遺跡群Ⅰ」
- (財)千葉市文化財調査協会 1993 「大谷城跡」「土気南遺跡群Ⅲ」
- (財)千葉市文化財調査協会 1994 「小山遺跡」「土気南遺跡群Ⅵ」
- (財)千葉市文化財調査協会 1996 「鐘つき堂遺跡」「土気南遺跡群Ⅶ」
- (財)千葉市文化財調査協会 1996 「後台遺跡」「土気南遺跡群Ⅷ」
- (財)千葉市文化財調査協会 1997 「千葉市高品城跡Ⅰ」
- (財)千葉市文化財調査協会 2002 「千葉市土気東遺跡群Ⅰ-奥房台遺跡・五十石西遺跡-」
- (財)千葉市教育振興財團 2008 「千葉市土気城跡」
- (財)千葉市教育振興財團 2009 「千葉市土気東遺跡群調査概報」

写真図版1



写真図版2



遺構状の落ち込み



作業風景(郭)



完掘状況(郭)1



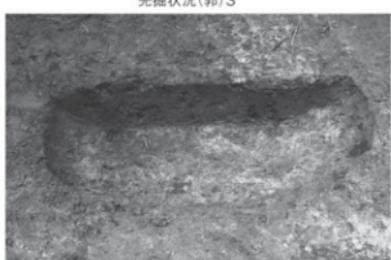
完掘状況(郭)2



完掘状況(郭)3



基本層序セクション(郭)



1号土坑セクション



1号土坑完掘状況

写真図版3



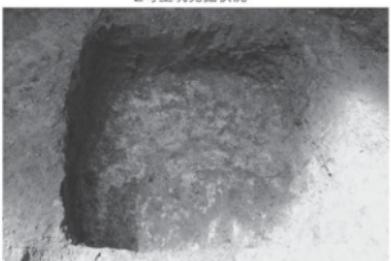
2号土坑セクション



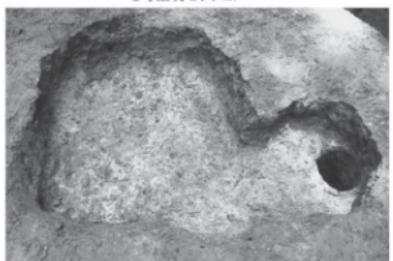
2号土坑完掘状況



3号土坑セクション



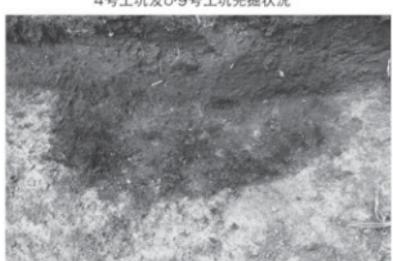
3号土坑完掘状況



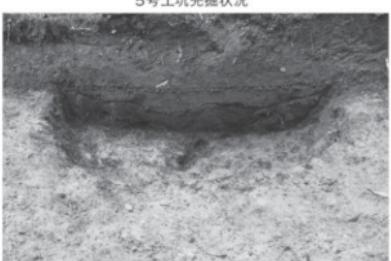
4号土坑及び9号土坑完掘状況



5号土坑完掘状況

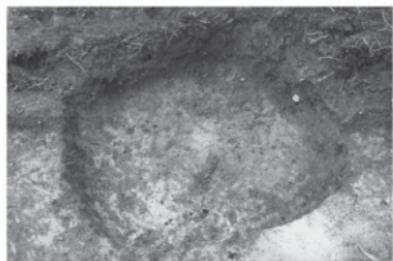


6号土坑検出状況



6号土坑セクション

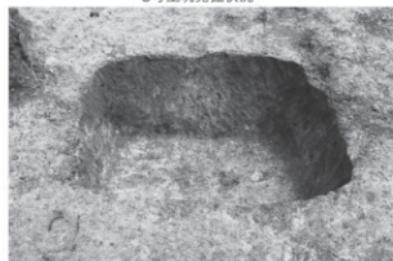
写真図版4



6号土坑完掘状況



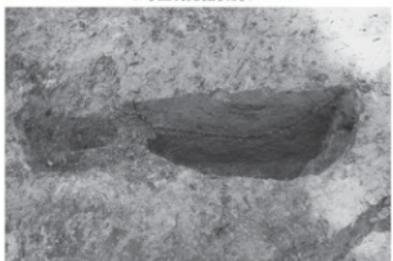
7号土坑セクション



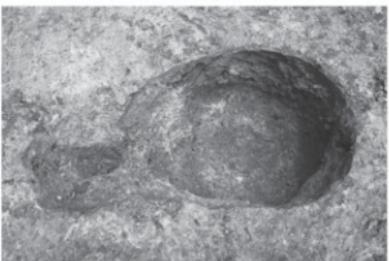
7号土坑完掘状況1



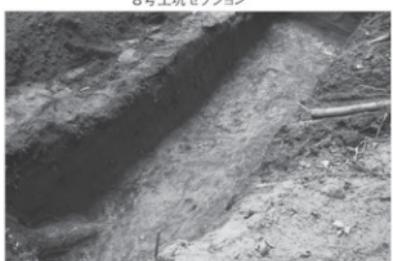
7号土坑完掘状況2



8号土坑セクション



8号土坑完掘状況



トレンチ5



作業風景(下段)

遺物写真

写真図版5



第10図-1



第10図-3



第10図-4



第10図-2



第10図-5

報告書抄録

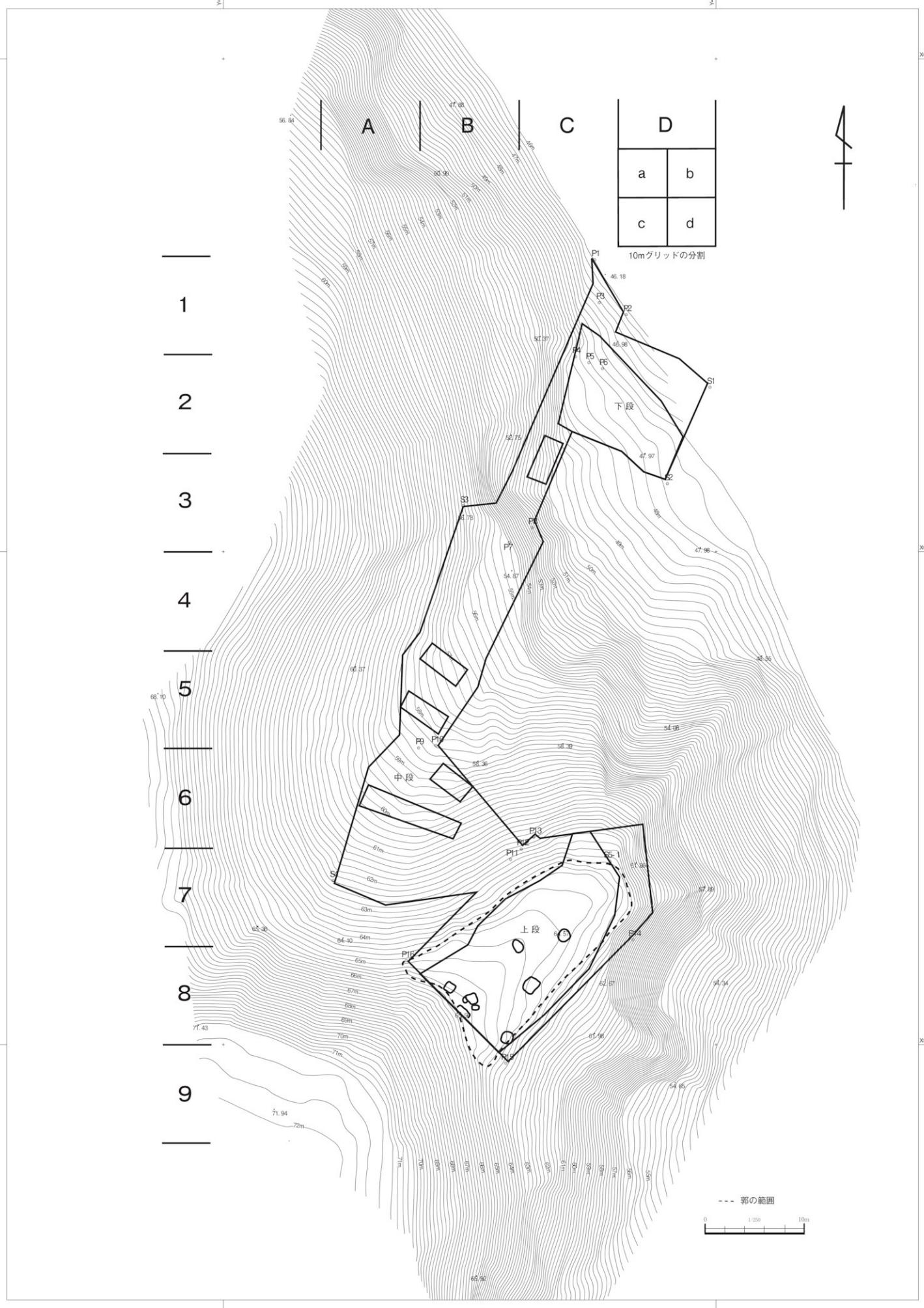
## 向城跡

平成22年3月31日発行

編集・発行 株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ  
財団法人 千葉市教育振興財団  
埋蔵文化財調査センター  
〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210  
TEL 043-266-5433

印 刷 株式会社 みつわ  
〒261-0002 千葉市美浜区新港213-5  
TEL 043-243-1511





第14図 千葉市向城跡全体図 (1/250)